アカシア NO.19

中国を見て・感じて・探る…大連事務所発のレポート

大連のネットニュース「天健ネット」より

大学統一入試 957 万人が受験へ　平均合格率は約 70%

今月 7 日と 8 日の 2 日間、中国全土が注目を集める今年の「高考（大学統一入学試験）」が実施される。教育部が 2 日に発表したデータによると、今年の「高考」は全国で 957 万人が受験する。計画合格者数は 657 万人、平均合格率は昨年比で 7 ポイント近く上昇した。

教育部大学学生司の姜鋼・副司長によると、今年の「高考」受験者数は 2008 年にピークを迎えて以降、昨年に続き減少しており、主な理由に適齢人口および高卒者の減少がある。一方で農村部の受験者数は依然として増加傾向で 592 万 2 千　人となり、全受験者に占める比率は 2001 年の 47.3%から今年は 61.9%にまで上昇、年平均増加率は 1.4 ポイントとなっている。

上記は中国版の大学入試センター試験の記事だ。「有名大学を卒業すれば今までの生活とは比較にならない程のバラ色の人生が開ける」と、中国の一人っ子には両親と祖父母の期待がかかる。受験戦争の加熱ぶりは日本以上だ。

センター試験とは言っても、中国の試験は日本とは異なり、その後の大学ごとの 2 次試験が存在せず、センター試験のみで合否を決めてしまう「一発勝負」のもの。中国全土の受験生たちの運命は、このたった 2 日間で決まってしまう。

「各省ごとに試験の内容が異なる」点、「大学の合格ラインが出身地によって異なる」点も日本と異なる。例えば 2007 年のデータによると、北京大学を受験する場合、北京に戸籍があれば 584 点取れば合格なのに、天津に戸籍がある受験生は 616 点取らなければ合格にならない。子供の受験が少しでも有利になるために、志望大学のある地域へ引越しをする家庭もあるほどだ。

これには背景として二つの要因が考えられる。まず、教育水準の地域格差が考えられる。建前上「地方出身者枠」を設ける大学は増えてはいるが、比較的高度な教育を受けている都市部出身者に対し大学側も門戸をより大きく開いているのが現状だ。

もう一つの要因が、大卒者の就職状況だ。従来の中国は、大ざっぱに言うと沿岸都市部出身のホワイトカラー層、内陸農村部出身の出稼ぎを含めたブルーカラー層、という雇用の住み分けがあった。

それが今では、北京、上海、広州といった大都市圏でホワイトカラーとして就職することこそが「成功」「人生の勝ち組」という価値観が定着し、全国の学生が就職により有利な有名大学を志望するようになった。そういって状況の中で、仮に全国同一の試験問題とし、合格ラインも全国同一とした場合、農村部から都市部への若年層の流入が加速することは間違いない。

バブル景気が続いている間は、都市部への出稼ぎ労働者が増えても問題ないが、バブルが崩壊すれば、都市部の失業率は一気に高まる。政府はこの都市部の失業率の悪化を懸念している。出稼ぎ労働者だけでなく、都市部の企業に就職するであろう大学生に関しても、できるだけ地方出身者を減らしたいと考えているのだ。

教育機会の均等を制度面から意図的に崩し、就学地と就職地の分散を図りたい。それにより、都市部の雇用問題が起こった時でも全国の問題にまで波及しにくくしたい。これが政府の本音なのではないだろうか。既に都市圏では学生の就職率が低下し始めており、雇用の需給バランスが買い手市場に傾きつつある。有名大学出身でエリート意識の強い大卒者が増える一方、満足のできる職場が増えず就職できない、就職しないケースが増えている。都市部の雇用は飽和状態に近づいているのだ。

冒頭の記事には、受験者数の減少は「適齢人口の減少」「高卒者の減少」が主な理由とあるが、農村部では受験者数が増加していることから、それだけが理由ではなく、海外留学志望者の増加も大きな要因として考えられるのではないか。

有望とされる企業への就職競争に勝つために、語学や専門スキルの習得を目的に海外の大学へ行く。場合によってはそのまま現地で就職させる。国内都市部の就職競争の激しさを目の当たりにし、我が子を何とかしたい、という富裕層が、子供を海外へ送り込む。こんな流れがあってもおかしくないのだ。

実際ここ大連へ駐在していても、日本への留学経験がある人は周辺に多い。見方を変えれば、少子化で経営環境の厳しい日本の大学にとって、これはチャンスと言えるのではないだろうか。